

万葉歌人の季節感

——人麻呂歌集非略体歌の霞・霧・雪を中心に——

渡 瀬 昌 忠

一 卷八・十の分類者

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧のうへに（古今集、秋歌）

消ぬがうへにまたもふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め（古今集、冬歌）

日本文学のうえで、霧を春のもの、雪を冬のものとする季節感の固定、その一般化は、平安時代になつてからのことである。否、平安末期においてさえ、八雲御抄のように、霞は夏にも秋にもよむものだとする歌学書があるくらいだから、まして上代には、これらの気象と季節との結びつきは、一般的にはごく自由なものであつたらう、と一往は考えられる。

雪	霧	霞	卷八
8		6	春
			夏
	1	1	秋
19			冬
27	1	7	計

その例としてあげうるのが万葉集卷八・卷十の季節分類である。卷八において、歌の素材としてよまれている霞（7例）・霧（1例）・雪（27例）の、分類された歌の季節は上表のとおりである。

霞は春歌にも秋歌にも、雪は春歌にも冬歌にもよまれている。別の言い方をすれば、春歌の素材としては霞よりも雪の方が多く、秋歌の素材としては霞と霧とが同数である。この事実からだけでも、万葉集卷八にあっては、霞・霧・雪の季節は固定し

ていなかったと言えるだろう。しかし、もう少し詳しく、これらの素材をもつ歌が何によってそれぞれの季節に採録されたのか、つまり、巻八の分類者の季節感はどうであったかを見よう。

これらの歌には霞・霧・雪以外に他の当季を示す語・文字があるかどうか、それを調べてみる。まず霞の七例。

- ① 春雑歌 大伴宿禰村上梅歌 霞立(春日之里)・梅花
 - ② 大伴宿禰駿河丸歌 霞立(春日里)・梅花
 - ③ 中臣朝臣武良自歌 春・霞(多奈婢久)
 - ④ 丹比真人乙麻呂歌 霞(立)・霧・春
 - ⑤ 春相聞 大伴宿禰坂上郎女歌 春霞(多奈引)
 - ⑥ 大伴家持贈坂上大嬢歌 春霞(軽引)
 - ⑦ 秋雑歌 山上臣憶良七夕歌 霞(立)・天河原
- これらのみな「霞」以外の「春」の文字や「梅花」「鶯」または七夕の「天河原」などの他の季語を有しており、単独の霞ではない。①の歌が春歌とされたのは、「霞立」の枕詞(または「霞」の語)によってでなく、「梅花」の語によってであったことは、題詞に「梅歌」とあるのでも明らかである。⑦もまた、「霞」の語とはかかわりなく、歌詞中の「天河原」または題詞の「七夕歌」によって秋歌とされたものである。②③④の場合も同様であろう。
- 秋雑歌 山上臣憶良七夕歌 1527 牽牛・天漢原・霧(立)
- この霧の一例も霞の⑦と同じである。つまり、巻八撰者によって、単独の霞や霧が春や秋の季語として認定されていたわけではなかったのである。
- 次に雪の歌について見るに、春の八例は

- (1) 春雑歌 駿河采女歌 1420 沫雪(零)・散花

	(2)	山部宿禰赤人歌	1426	梅花・雪(零)
	(3)	〃	1427	春菜・雪(布利)
	(4)	大伴宿禰三林梅歌	1434	霜雪(未過)・梅花
	(5)	大伴宿禰村上梅歌	1436	梅・沫雪(零)
	(6)	中臣朝臣武良自歌	1439	春・三雪(零)
	(7)	大伴宿禰家持鷲歌	1441	雪(零)・鷲
	(8)	大伴坂上郎女歌	1445	雪(零)・梅・花

右のごとく単独の雪がない。これらが春歌に採られたのも、「雪」の語によってではなく、他の春の季語によってであったことは、霞の場合と同様で、(4)(5)(7)の題詞の「梅歌」「鷲歌」を見てもわかることである。しかし、冬歌の雪一九例の中には単独の「雪」が約半数の一〇例もある。列挙は省略して歌番号のみ記す。(下線を引いたものは、題詞にも雪の語を有する。)

冬雑歌	1366	冬相聞	1655
	1639		1658
	1643		1659
	1646		1662
	1650		
	1654		

これら一〇首は、「雪」以外に他の季語を有せず、その「雪」が冬の季物・季語として認定せられた結果、冬歌に採られたものである。春雑歌の雪は、他の春の季語によって、残雪・春雪と見なされたものにほかならぬ。

要するに、万葉集巻八の季節分類に働いた意識には、雪を冬のものとする季節は認められるが、霞を春のもの、霧を秋のものとする季節感には、いまだ必ずしも明確ではなかった。

巻十についても同様のことが言える。かつて述べたところだが(『文学語学』44号、昭和42年6月、拙稿)、巻十では、霞(31例)と霧(15例)とが共に春・夏・秋の歌の素材となっており、人麻呂集非略体歌を除いては、単独の「霞」や「霧」がほとんど存在しない。「ほとんど」と言うのは、春相聞に「霞」以外に他の季語をもたない二首(一九二二・一九三二)が存する

からだだが、その二首にも「たまきはる靈寸春」「かすが春日」の語に「春」の文字が用いられている。非略体歌以外の、少なくとも巻十雑歌部の霞の歌すべて、巻十の霧の歌すべては、「霞」「霧」以外の他の季語によって、それぞれ春・夏・秋に分類されている。巻十撰者にも、霞を春、霧を秋とする明確な季感は乏しかったのである。雪はどうか。

巻十の雪は全部で四四例。その内訳は、春雑歌一五例、冬相聞一四例である。これは、巻八の雪二七例が、春雑歌八例、冬雑歌一四例、冬相聞五例であるのと共通で、いずれも春相聞・夏・秋には雪歌がない。巻十春雑歌の一五例の雪は、「詠雪」一一例（一八三二～一八四二）「詠柳」の二例（一八四八・一八四九）「詠花」の一例（一八六二）「旋頭歌」の一例（一八八八）であるが、これらには単独の雪なく、すべて「春」「梅花」「恵具」「鶯鷺」「河柳」等の他の春の季語によって春歌とされていること、巻八春雑歌の雪に等しい。しかし、巻十冬歌の雪（あられ・はだれヲ含ム）二九例のうち、単独の雪は非略体歌四例を含めて次の二三例、

冬雑歌 2312 2313 2314 2315 2316 2317 2320 2321 2322 2323 2324 冬相聞 2333 2334 2337 2339 2340 2341 2342 2343 2345 2346 2347 2348

八割を数える。これは巻八冬歌の雪一九例のうち単独の雪が一〇例、五割であったのよりも、遙かにその割合が多い。巻十撰者が雪を冬の季物・季語と認定したことは明白である。

以上を要するに、巻十にあっても、巻八と同じく、雪は単独で冬の季語として認められたが、霞・霧は単独では春・秋のものとは認められなかった。したがって、万葉集巻八・巻十の分類・編纂者には、霞を春、霧を秋、雪を冬とする三拍子揃った季節感は明確でなかった、と言わなければならない。

二 非略体歌集の分類者と赤人ら

万葉集中、季節分類の施されている二巻のみの巻八と巻十においてすら、右のごとくであるとするならば、奈良朝以前、藤原朝における霞・霧・雪の季節感の成立などは考えも及ばないことになりそうだ。ところが、実はそうでない。

巻十の中で、春雑歌の冒頭に一括採録されている人麻呂集非略体歌の霞の歌は、その七首（一八二二～一八一八）のうち半数に近い三首（一八一六～一八一八）までが単独の「霞」の歌である。巻十雑歌の他の部分には全然見られない

こうした現象がここにもみられるのは、卷十撰者が、既に独自の季節分類の施されていた非略体歌集の春歌群から、これらの霞の歌どもを一括採録した結果にほかならぬ（『文学語学』44号、前掲、抽稿）。そして、卷九所載非略体歌の季節歌群（一六九四―一七〇九）の秋歌一〇首（一六九九―一七〇八）中に単独の「霧」の歌が二首（一七〇四・一七〇六）あり、卷十秋雑歌七夕の非略体中にも七夕に関する季語をもたぬ単独の「霧」の歌が一首（二〇〇八）ある。これらの事實は、非略体歌集の季節分類においては、単独の「霞」・「霧」が春・秋の季語として認定せられていたことを示すものである（『文学語学』44号、抽稿、および、『万葉集』67号、昭43年5月、抽稿）。さらに、卷十冬雑歌冒頭の非略体歌の「雹（手走）」の一首（二三二二）、「三雪（落）」

「沫雪（流）」「雪（落）」の三首（二三二二―二三二五）、卷九所載非略体歌の冬歌の「波太列（落）」の一首（一七〇九）、これら五首の素材はすべて単独で冬歌の季物・季語であり、一方、卷九所載の春歌の「三雪（遺）」（一六九五）は「いまだ冬かも」の詞句によって春の残雪と認定されたものにちがいない。すなわち、人麻呂の非略体歌集の季節分類においては、霞を春、霧を秋、雪（あられ、はだれ）を冬とする、明確な季節感が存在していたのである。

平安時代まで固定化、一般化せず、万葉集卷八・卷十の分類においても明確でなかった右のような季節感が、万葉集の編纂資料となった一私家集の分類においてすでに確立していたというのは、どういうことであろうか。われわれは、この時流を抜きんでて先駆的な輝きを放つものに驚かなくてはならない。そして、そうした季節感による歌の季節分類という、ささやかながらめざましい事業が、いつ、だれによって、いかなる意味をもって、なされたものであったかを問わなければならぬ。

人麻呂集非略体歌の作者にとっては、

子らが手を卷向山に春されば木の葉凌ぎて霞たなびく、（10一八一五）

秋されば川霧立てる天の川河に向き居て恋ふる夜そ多き、（10二〇三〇）

妹が門入りいづみ川のとこなめにみ雪遣れりいまだ冬かも、（9一六九五）

これらの歌に端的に示されているとおり、霞は春の到来とともにたなびき、霧は秋の到来とともに立ち、雪は冬の間にのみ見られるはずのものであった。非略体歌制作の場としての皇子を中心とする季節行事において独自に培われた、霞・霧・雪に対するこうした非略体歌作者の季節感が、如上の非略体歌集の季節分類に働いたそれと同一のもの

であることは、言うまでもない。しかも、この季節感が柿本人麻呂の作歌のそれにも通じるものであったこと、および非略体歌集の分類者が人麻呂自身でありうる可能性の強いことは、別に述べた(『国学院雑誌』70巻、5号・11号、拙稿)。本稿では、人麻呂以外の歌人たちの季節感について、また、彼らが非略体歌集の季節分類者でありうる可能性の有無について、検討を加える。

第一期では、磐姫皇后の作と伝える「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」(288)の秋の霞と軍王の「霞立つ長き春日」(15)の春の霞とが注目される程度で、人麻呂の先蹤とも称すべき額田王にも、雲の歌はあるが、霞や霧や雪を歌った歌は一首もない。

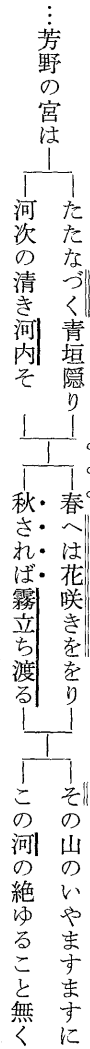
人麻呂と同時代の、第二期の歌人たちはどうだったか。天武天皇(125・210三)、藤原夫人(210四)、高市黑人(1740一六)、穂積皇子(220三)、舍人娘子(816三六)、駿河采女(814二〇)、三方沙弥(1942二七七八)、以上の歌人たちには「雪」の歌があるだけで、霞や霧の歌はない。また、長皇子(165)には「霞」、舍人皇子(91七〇六)丹比笠麻呂(450九)には「霧」、鴨足人(325七)碁師(917三二)には「霞」の歌が、それぞれ一例ずつあるのみだ。すなわち右の歌人たちは、雪か霧か霞かの一種のみを歌ったにすぎない。その他の同時代歌人、持統天皇をはじめ長興麻呂や春日老には、霞も霧も雪も一首もない。

古(歌)集の歌には、「霞」が一例(712三四)、「春霞」が二例(712五六・917七一)、計三例の霞がよみこまれているが、霧や雪は一例もない。

人麻呂と同じく、万葉集の編纂資料となった私家集をもつ、金村・虫麻呂・福麻呂の場合はどうか。笠金村(作歌・歌集)には「雪(零)」の歌は二首(462四・917八六)あるが、霞の歌、霧の歌は一首もない。高橋虫麻呂(作歌・歌集)には、六月の不尽山の「雪」を詠じた長反歌(331九・三三二〇)があり、「春日之霞時爾」(917四〇)に「霞む」の語はあるが、霧の歌はない。田辺福麻呂(作歌・歌集)の歌には、霞も霧も雪すらもない。彼ら三人の万葉私家集歌人は、霞・霧・雪の明確な季節感をもっていたとは言えず、したがって彼らは非略体歌の、あるいは彼ら自身の歌の、季節分類者たる資格などはもたなかったのである。

人麻呂および非略体歌作者と同様に古い国見歌の伝統を深く継承しつつ、新たに繊細な季節感を示したのは山部赤

人であったが、彼はまた、後世をして赤人集なるものを伝承せしめた歌人として、柿本集をもつ人麻呂と相似た側面をもつ。赤人の作歌には、人麻呂を踏襲しつつ、反歌にいたるまで一貫して吉野の山と河とを対比させた周知の長反歌（6九三〜九二五）があるが、ここでは次のように



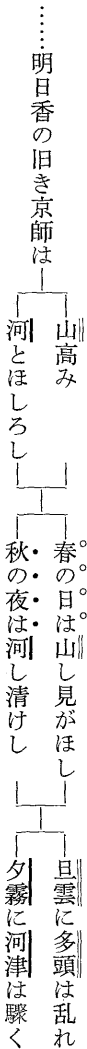
春の山の花と秋の河の霧とが対句表現されている。この「秋されば霧立ち渡る」は、前掲の非略体歌一首以外に「秋されば」を霧と結んだ万葉集中ただ二例のうちの一例（他の一例は家持、後述）である。ここには明らかに霧を秋のものとする季節感があり、類まれに人麻呂集非略体歌に接近する赤人の横顔がある。

赤人にはまた、不尽山の「時じく」の雪を歌った長反歌（3三二七・三二八）のほか、次の二首の雪歌がある。

吾が背子に見せむと念ひし梅の花それとも見えず雪のふれば（8一四二六）
 明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪はふりつつ（8一四二七）

初春の景物である梅花や、初春正月の行事である若菜摘みの行なわれる野に、冬のものとしての雪のふることへの、屈折した、しかし新鮮な詠嘆である。ここには、曆法によって進行し暦日とともに推移する季節および季節行事があり、それを母胎にして生まれたみやびやかで女性的な季節感がある。赤人には、霧を秋、雪を冬のものとする季節感疑いなく存在した。

しかしながら、赤人には春の霞を歌った歌が一首もない。赤人にとっては、春の気象は霞ではなくて雲であった。「登神岳」と題された赤人作歌（3三三四〜三三五）の



右の対句によれば、秋の河の霧に対するものは、春の山の雲である。また「登春日野」と題された赤人作歌（3三

……高座の御笠の山に――
 朝さらず雲居たなびき
 容鳥の間無くしば鳴く
 雲居なす心いさよひ
 その鳥の片恋ひのみに

と歌われる。「登^三神岳」作歌では春の山の朝雲に鶴を配していたが、ここでは春の鳥である容鳥に山の朝雲を配している。彼は春の霞を歌わず、むしろ古風に、春の国見の対象としての雲と鳥とを素材にしているのだ。赤人には他にも雲の歌、鳥の歌が多い。春の歌人と称してよいほどに春歌の多い赤人にとって、雲は春のものだったのである。雲を春とする赤人の季感は、霞を春、雲を季節不明とした非略体歌集分類者の季感と明瞭に相違する。そして、ただこの一点において、赤人は非略体歌集の分類者として失格なのである。

三 六朝文学圏と憶良・旅人たち

類聚歌林の編纂者でもあつた山上憶良の場合はどうか。巻八秋雑歌の「山上臣憶良七夕歌十二首」と題する七夕歌の最後の一群に

牽牛し嬌迎へ船こぎ出らし天の漢原に霧の立てるは(一五二七)
 霞立つ天の河原に君待つとい行き還るに裳の欄沾れぬ(一五二八)

という二首がある。成立時は不明ながら、おそらく天平三年七月以後、憶良最晩年の作であり、しかもこの並べられた二首は同時同場の作と思われる。その二首において「天の河原」に「立つ」ものが「霧」でもあり「霞」でもあるということは、憶良において、霞と霧とが春と秋という特定の季節と結びついたものでなかったことを示している。やはり憶良晩年の作である貧窮問答歌には

風雜り雨ふる夜の 雨雜り雪ふる夜は すべもなく寒くしあれば……(五八九二)

「雪」が貧窮の寒さの表現の素材となっている。この歌には「冬」の語は一つもないが「寒」の字は前半に四回も使用され、雪を厳寒のものとする感覚は明瞭である。巻八秋雑歌に秋野の七種の花の歌(一五三七・一五三八)を留め

て季節感の進んでいたはずの憶良であるが、彼にも、雪を冬とする季節感があつても、霞を春、霧を秋とする季節感はその晩年においてすらなお不明確だったのである。

憶良のみならず筑紫歌壇には同様の傾向が看取せられる。卷五の、天平二年正月十三日、旅人宅での「梅花歌」中の次の三首

梅の花ちらくはいづくしかすがにこの城の山に雪はふりつつ（八二三、伴氏百代）

春の野に霧たちわたりふる雪と人の見るまで梅の花ちる（八三九、田氏真上）

霞たつながき春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも（八四六、小野氏淡理）

第一首の、春ちる梅の花と「しかすがに」の語によって対比されたふる、「雪」には、赤人の場合と同様に、雪を冬のものとする季節感がある。しかし、第二首の「霧」と第三首の「霞」とは共に春にたつものとして歌われている。極端に言えば、筑紫歌壇の作者たちにとっては、春の梅花に配すべき気象は雪でも霧でも霞でもかまわなかったのだ。それは、憶良にとつて秋の天の河にたつものが霧でも霞でもかまわなかったのと同じである。

梅花の宴の主人であつた大伴旅人には、梅と雪とを同時によみこんだ歌が四首（五八二・八四九・八五〇、八一六四〇）ある。それが冬の雪の初春における残雪として歌われたものであることは、「のこりたる雪」（五八四九）「遺れる雪」（八一六四〇）の語句によつて知られる。しかし、旅人には霞の歌と霧の歌とは一首もなく、彼の筆に成るかと思われる梅花歌の「序」には

曙嶺移レ雲 松掛レ羅而傾レ蓋 夕岫結レ霧 鳥封レ穀而迷レ林……忘言一室之裏 開レ衿煙霞之外

雲と霧とが隔句対で対比せられ、煙霞も素材となつていて、旅人は彼の周辺の歌人たちと同様、霧や霞に特定の季節感を感じていない。その前年天平元年の冬十月七日に作られた「梧桐日本琴一面」の序にも

長帯ニ烟霞 道ニ遙山川之阿 遠望ニ風波 出入鷹木之間

烟霞と風波とが対比せられ、季節感はない。憶良・旅人・筑紫歌壇の官人たちの霞・霧・雪に対する感じ方は、中国六朝の文学やその影響下にあつた日本漢詩の世界におけるそれに近いのではないか。

玉台新詠卷十の近代呉歌九首中に一首ずつの四時歌がある。その春歌には「初花」、夏歌には「芙蓉」、秋歌には「秋風」「明月」、冬歌には「淵氷」「素雪」が、主な素材となっている。ここには、雪を冬とする季節感は認められるが、春の霞や秋の霧はない。また、同じく卷十の梁武帝詩二十七首中に春歌三首、夏歌四首、秋歌四首がある。春歌の素材としては「花」「蘭葉」「梅花」などの植物が主で、「素水」「白雪」もあるが、これは一首の中に「黄花」「梅」「陽春月」と共に歌われた春雪である。夏歌には「蓮花」「朱李」「含桃」「黃鳥」「蚕」、秋歌には「夜月」で、霞や霧はどこにもない。梁武帝の勅によって作られた沈約の白紵詩は春夏秋冬と夜との五章より成るとしたが、玉台新詠卷九にある春日白紵曲一首には「蘭葉」「桃半紅」、同じく秋日白紵一首には「白露」「草色黃」、これらの季物があるのみで霞や霧はない。

樂府詩集の子夜四時歌にうかがわれるところもほぼ同様で、冬歌に雪・霰の類はあるが、霞や霧は皆無である。玉台新詠に天象気象を探ってみると、

霧夕蓮出レ水 霞朝日照レ梁（卷五、何遜、看新婦）

一首の中に霞と霧とが朝と夕とに対句表現されて季節差は感じられていないし、春の雑詩に次のように霞も霧も雲もよみこまれる。すなわち、「妖姬競早春」に始まり落日看還と題する詩に

苔輕變ニ水色 霞濃掩ニ日輪（卷八、鮑泉、雜詩）

「季春梅始落」に始まる採桑詩に

藹藹霧滿闌 融融景盈幕（卷四、鮑照、雜詩）

また「春心多感動」と歌う詩の冒頭に

雲輕色転暖 草緑晨芳帰（卷五、柳惲、雜詩）

とあるのがそれである。そして、秋の七夕詩にも

縫旗若レ吐レ電 朱蓋如レ振レ霞（卷三、王鸞、七夕觀織女）

瑤台含ニ碧霧 瓊幕生ニ紫煙（卷七、梁武帝、七夕）

比喻にせよ、ひとしく霞・霧・煙がよみこまれる。

玉台新詠に限らず、芸文類聚に引くところで一・二の例をあげるなら、第三卷歳時部上、秋の詩の、瘦肩吾の奉和便省余秋詩に「雁行連霧尽 雨足帶雲移」とあるとともに、第四卷歳時部下、七月七日の詩の、張文恭の七夕詩に「凌霞曳綺衣」とあって、霞・霧・雲が共に秋の詩の素材たりえている。また同じ「丹霞」が、「丹霞横景」(第三卷、傳玄、陽春賦)は春の賦の、「霏丹霞而為裳」(第四卷、謝朓、七夕賦)は秋の賦の素材なのである。

これらに対して、雪は、氷とともに、近代呉歌九首の冬歌に単独でその素材となったことによって、明確な冬の季物であった。

雪罷枝即青 氷開水便綠 復聞黃鳥聲 全作「相思曲」(玉台新詠卷十、王僧孺、春思)
雪がやみ、氷がとけて、はじめてうぐいすの鳴く春がやってくるのである。

以上によって、中国六朝の詩賦においては、雪は冬の季物であったが、霞と霧とは季節感の明確な気象でなかったことが明らかであろう。

わが懐風藻においても事情は同じであって、

月舟移霧渚 楓檝泛霞浜 (文武天皇、詠月)

朝雲指南北 夕霧正西東 (大伴王、從駕吉野宮、応詔)

一首の中に、霞と霧、霧と雲が対句表現され、同じ秋の詩に、次のごとく

菊風披夕霧 (吉智首、七夕) 泛菊丹霞自有芳 (藤原宇合、秋日於左僕射長王宅宴)

霞と霧とが菊に配せられている。対して、次の詩には、雪を冬、花を春とする觀念が見える。

雪花含彩新……園裏看花李 冬条尚帶春 (文武天皇、詠雪)

天平初期(七三〇年ごろ)の憶良・旅人らの霞・霧・雪に対する感覚や觀念は、懐風藻の詩におけるそれと同じく、六朝文学圈内のものであったと言つてよい。これは、その後の漢詩文の世界にも継承される。

平安時代初期、九世紀にはいつて、ほぼ時を同じくして編まれた、文華秀麗集と文鏡秘府論とに触れておきたい。

前者は、文選式の類聚法をとった勅撰詩集だが、文選と異つて注目されるのは、季節順配列を企図している部立のあること(『日本文学史』中上巻前期、第一章漢文学、小沢正夫氏拒当)である。巻上の冒頭「遊覽」一四首は、春七首、夏三首、秋四首と並べられ、巻中の

「艶情」一一首は、春四首と秋七首とから成る。この季節順配列は、勅撰集において最初のものであり、日本文学における季節分類の發生萌芽期の様相を知る手がかりなる。注目すべきことは

①「春」「夏」等の目を立てずに季節歌群をなしていること

②個々の作品に題詞を付したままで季節分類をしていること

③四季を具備せぬ三季または二季の季節分類であること

④各季の歌数に片寄りがあってもあえて整えようとしていないこと

以上の四点である。これらは、万葉集所載歌から推定しうる人麻呂歌集の非略体歌原本における季節分類の様相(『国学院雑誌』63巻78号以下諸拙稿)と共通する点が多く、私家集と勅撰詩集との違いや時代のへだたりやを越えて、日本の季節分類發生期における共通点と考えられる。

しかし、文華秀麗集の詩作者の季感においては、非略体歌のそれとは異って、次に掲げるように、霞も霧も共に春の詩の素材であり、特に霧は、春の詩にも秋の詩にも詠ぜられていて、その季節が固定していないのである。

(春) 奉和春日江亭閑望一首 仲雄王「商帆艤」早霞」(卷上、遊覽)

(春) 奉和春日江亭閑望一首 巨識人「霧卷巨帆懸」(同右)

(秋) 秋山作応製一首 朝鹿取「谿生濃霧織薄縠」(同右)

空海の文鏡秘府論の地巻に「九意」すなわち春・夏・秋・冬・山・水・雪・雨・風の各意に類聚された詞句がある。そこでは、次に例示するように、霧は雲とともに四季各意の素材たりえており、霞は夏と秋とに登場するが春意と冬意とはその素材となっていない。

春意 雲生似蓋霧起如煙(山行) 羅雲出岫綺霧張天(山行)

夏意 煙雲夕卷火霧朝開 宋霞東起赤日西頽(日晚)

秋意 錦霞朝暗碧霧宵清 羅雲靄靄玉露凄凄

冬意 雲凝五岫霧結三門 重帷雪入複幔霧侵

さすがに雪だけは冬意に(三例)見えるだけで他の季節の素材となっていないが、霞が春意になく、霧がどの季節に

もあるということは、霞・霧を春・秋とする季節感がまったく存在しなかったことを示す。

六朝文学圏の季節感とは日本文学における季節感の発達を促進させ、また、楽府詩の子夜四時歌や玉台新詠の四時歌や芸文類聚のような類書の四季分類などは日本の詩歌の季節分類を成立させる媒材として働きつづけていたと思われる。人麻呂歌集もその例外ではないだろう。しかし、六朝文学のそれらは、人麻呂歌集非略体歌の作者および非略体歌集の季節分類者の季節感をば直接に生み出したものではなかった、と言わなければならぬ。非略体歌の季節感とは、それらからの影響の外に、いち早く独自に創造的に、一步を踏みだしているのだ。霞・霧・雪の季節感において、六朝文学の圏内にとどまっていたいた憶良や旅人たちが、非略体歌集の季節分類者でありえなかったことは言うまでもない。

四 家持とその後

大伴坂上郎女には霞の歌は次の一首のみ、

情ぐきものにそありける春霞たなびく時に恋の繁きは（8一四五〇、春相聞）

これは春の霞である。霧の歌は次の一首のみ、

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しき（6九八二、月歌）

この「夜霧」は季節不明である。雪の歌で注目されるのは次の二首である。

風交り雪はふるとも実にならぬ吾宅の梅を花にちらすな（8一四四五、春雑歌）

沫雪のこのころ過ぎてかくふらば梅の始花散りか過ぎなむ（8一六五一、冬雑歌）

二首とも申し合わせたように「大伴坂上郎女歌一首」という同一の題詞をもち、雪のふることを仮定して梅花の散るを惜しむ（寓意の有無は別として）点、題材と発想とを同じくする。ところが、万葉集卷八では、前者は春に後者は冬に分類されている。これには卷八の成立問題がからんでいるがそれはしばらく措き、この両首自体において、「雪」は「梅花」とともにその季節が冬・春いずれとも明瞭でなかったのだ。坂上郎女においては、霞は春のものとして歌われているが、霧と雪とはその季節が明確でない。

大伴旅人を中心とする筑紫歌壇や坂上郎女において、霞・霧・雪の季節感が明確でなかったとすれば、そうした人々の影響下に成長した大伴家持においても同様であつたろうことは想像にかたくない。事実、天平十一年夏六月に妻を亡くした家持は、秋七月「悲緒未息更作歌五首」の中に

佐保山にたなびく霞見るとに妹を思ひ出泣かぬ日は無し（三四七三）

と、初秋の霞に亡き妻をしのんでいる。またその前年の初秋、天平十年七月七日、西池宮では聖武天皇の勅によつて吉備真備を筆頭とする才子文人たちの雅会の開かれていた夜（統紀）、家持は「独仰三天漢聊述懷一首」を作つたが、その時はまだ、天の川にたつものは

たなばたし船乗りすらしまを鏡きよき月夜に雲起ちわたる（一七三九、〇〇）

霧ではなく雲であつた。そして、天平十八年正月の雪の肆宴に、家持もまた「応詔歌一首」を作り、

大宮のうちにも外にもひかるまでふれる白雪見れどあかぬかも（一七三九、二六）

単独の雪を春正月のものとして讃え歌っている。少なくとも内舍人時代初期の家持には、霞を春、霧を秋、雪を冬とする季節感は固定していなかつたのである。

ところが、家持は後に右の季節感を次のように明瞭に示すようになる。

ひばりあがる春へときやになりぬれば都も見えず霞たなびく（二四四三、四）

秋されば霧たちわたる天の河石並みおかば継ぎて見むかも（二四三二、〇）

み雪ふる冬にいたれば 霜おけどもその葉もかれず……（一八四二、一）

天平感宝元年閏五月廿三日、橘歌）
特に「秋されば」を霧と直結した表現は、万葉集中、前述の非略体歌一例と赤人の一例とそして家持のこれとの、三例のみである。

万葉集において、人麻呂と非略体歌の作者とのほかに、右のような霞・霧・雪の三拍子揃つた明確な季節感を示す歌人は、家持のみなのである。しかもそれは、家持の生涯の中途におけるある時期に生じてきている。ここに、非略体歌の季節感の影響が家持に及んでいるのを見ることができよう。その影響は、家持の内舍人時代末期から越中守時代にかけてのことであつたろう。その時期は、非略体歌集の季節歌群を規範とした「大伴宿禰家持歌集」とも言うべ

き季節歌集が、家持によって編纂されたと考えられる(万葉集 67号拙稿)時期とも重なってくる。その間の事情については、さらに立ち入った考察を必要とするが、ここでは、家持の右の季節感が彼の生来身につけていたものでなく、したがって、初期の家持が非略体歌集の季節歌群に対する能動的な分類者ではありえなかったことを、指摘すればたりの。彼は、やがてやって来る一時期に、非略体歌の季節感や非略体歌集の季節分類から影響を受け、それを規範としそれを模倣する立場に立つのである。初期の家持もまた、赤人・憶良・旅人・坂上郎女たち、そして、晩年の家持がそれである可能性の強い巻八・巻十の撰者らと同じく、非略体歌集の季節分類者編者ではありえなかった。

以上によって、非略体歌集の季節分類者が、非略体歌の中心的作者であった人麻呂自身であろうとする私見(國學院 70巻11号、拙稿)は、それが他の万葉歌人たちではありえないという補強を得たことになろう。

家持以後において、霞・霧・雪の季節感の明確に見られる最初は、九世紀末の寛平御時后宮歌合と新撰万葉集とである。

寛平御時后宮歌合においては、霞は春歌の中の九首によまれて他の季節になく、霧は秋歌に一首のみであり、雪の類は、冬歌の中に霧が一首、雪が二三首もあって、他には春歌の中に「雪降り止まぬ春」「春降る雪」の二首の春雪があるのみである。

道真の新撰万葉集(卷之上)においても、霞は春歌の中の七首のみ、霧は秋歌の中に一首のみ、雪の類は、冬歌に霞が一首、雪が一三首あり、春歌に「春・花・鶯」ともによまれた「白雪」の一首があるのみで、右の后宮歌合と全く同じ傾向を見せる。つまり、両者において、霞は春、霧は秋、雪(あられ)は冬と、その季節が固定化しているのである。しかも新撰万葉集においては、そうした歌の素材と同じものが、季物として七言絶句に詠ぜられていた。その点で、同じく詩句の四季分類であっても、文鏡秘府論の「九意」中の六朝風な素材とは著しく異ってきている。

非略体歌と同じく詩句の四季感の固定化が、九世紀末の歌合の盛行とともに顕現してくることは、そうした季節感が、その発生から固定化へのかなり長い過程を通じて、季節にかかわる歌の場と切り離しえないものであることを語る。皇子を中心とする季節行事であった非略体歌制作の場合は、その本質において、ほんらい後宮の季節行事であった

歌合と、似るところがあったのである。

本稿に述べたところを一文に概括すれば、次のように言われよう。霞・霧・雪を春・秋・冬とする季節感
は、奈良朝にはいない前（八世紀初頭以前）の人麻呂歌集非略体歌において、すなわち人麻呂において、その歌の場
としての季節行事を基盤として、日本文学史上初めて発生し、非略体歌集の季節分類に働き、大伴家持に影響し、そ
して、平安朝初期（九世紀末）の歌合において固定化を見た、と。それは、六朝文学の世界とかかわりながらも、そ
こから一步を踏みだしたところで、独自に行なわれた創造的内発的な過程であった。

〔付記〕 本稿の骨子をなすものは、昭和44年5月に東海大学で行なわれた上代文学会大会での発表の後半部である。その前半部
を骨子とした小論は、『国学院雑誌』70巻11号（昭44年11月）に掲載された「人麻呂の非略体歌集の編者は誰か」と題するもの
である。